

一般にがん細胞は増殖する悪質な細胞であると認識され、早期発見早期治療のため検査機器や手術手技の開発は日進月歩の状態です。

日本は、少子高齢化に向かい、不妊問題は深刻です。その背景には、女性の生殖器がんの低年齢化と、対応する医療のあり方にも重大な問題があるように思えます。

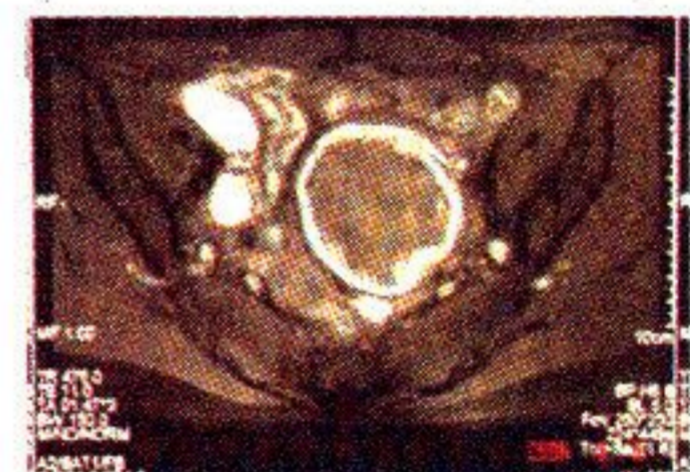


自然医学総合研究所所長  
大沼 四郎

循環障害などの影響を受けます。初期には、腰痛や、生理痛が起こり、痛み止めやホルモン療法が、免疫力を厳弱させ続けることが、女性の生殖器がんの低年齢化と一致する様に思えます。

歪みを挙げています。その根拠は、過剰なストレスと対峙すること、右の骨盤（腸骨）が上に、前に捻転する性質があると考えています。この変化を、「骨盤の上前方変位」と呼んでいます。歪んだ骨盤の影響を受けるのは、背骨の中を走る中枢神経だけではなく、膀胱、直腸、生殖器等の内臓も

免疫疾患と言い、がん体質の絶対条件となっているのです。健常者の生理時の出血は、色も鮮やかな赤みをおび、量も多いものですが、薬品や過剰なストレスにより、血液は汚れて黒ずみ、粘着性が高まり、出血量も減少傾向に至ります。この状態が長引くことと、右側の骨盤が歪むことから卵巣や子宮を支配する血管が萎



平成18年1月16日のMRI画像。12号大で白く変色していることから水が溜まっている可能性を指摘された(上)。下は6月20日当院でNRT自然免疫活性化療法受療6ヶ月後、4号大に縮小されていることが確認された



ニオンを受けましたが同じ説明を受けました。切除してから体質改善を行う予定でしたが、親類の勧めでNRT自然免疫活性化療法を受けました。六カ月が過ぎましたが、MRIが示すように、卵巣と付随するリンパなどを切除されることもなく順調に縮小しています。従って、医療を選択する際には、自然療法も考慮したサードオピニオンまで視野に入れてほしいものです。

自然治癒を科学する

がんの盲点⑧

縮し、古い血液を貯留することになります。特に子宮や卵巣は残りやすく、やがて腫瘍へと成長すると考えられます。そのため多くは右側の卵巣に発症することになるのですが、左側に体重が偏りすぎている場合、左側の血管が硬直するため左側に発症することになるのです。

女性(52)の症例を紹介いたします。女性は、十八年一月に受診しました。その結果悪性卵巣がんと診断され、セカンドオピニオンを求めました。その結果悪性卵巣がんとなり、不整脈、無呼吸症、眼が浅い、自立神経失調症、冷え、頻回排尿、

（毎月第一火曜日に掲載します）  
（名誉医学博士・生化学博士・平成11年度社会文化功労賞受賞・ナチュラルケアセンター院長）

そこで下腹部が膨張するとか急激な体重増加や腹痛など気になる

**講演会のお知らせ**  
**講師：**大沼四郎 自然医学総合研究所所長 ナチュラルケアセンター院長 平成11年度社会文化功労賞受賞 生化学博士・名誉医学博士  
**開催日：**9月24日（日）名古屋市東区ウィルあいち2F特別会議室 入場無料  
**テーマ：**がんの盲点（9）「再発の原因・卵巣がん切除から1年後余命1年と宣告された」  
**時間：**午後1時開場 4時30分終了  
**主催：**民間非営利団体 国際自然免疫学会  
**共催：**自然医学総合研究所  
**申し込み：**自然医学総合研究所 TEL 052・801・7063まで  
**特典：**先着50名様に解毒療法の割引券を贈呈

問い合わせ  
電話 052・801・7063  
Eメール shiro@nrt.ne.jp  
URL http://www.nrt.ne.jp